

# チリ南部の氷河湖を訪ねて

小村 幸二郎 (鉦床部)  
Kohjiroh KOMURA

真夏の南米への旅とはいえ 南緯47度付近となるとかなり寒い。大型のトランクは今にも張り裂けそうだが大部分が防寒用の衣類なので 見た目よりは軽い。

離陸後1時間ばかりして 夕食が配られた。満席の客に食事を運ぶスチュワーデスを見ていると 時折 疲れが顔ににじみでていることがあるだけに 気の毒に思うことがある。ステーキ・サラダ・ざるそば・ロールパン・マロンクリーム・コーヒーの夕食は 11,350mの上空で 一かけらも残らず胃袋に納ったが 昼食後10時間ばかり過ぎていた故か これでもまだ 胃袋には隙間があるらしい。だが 食後に運ばれてゆく膳には 殆んど食べ残されたものがあることから察すると 既に夕食を済ませたか緊張の余り食欲のなかった人がかなり多いらしい。

初めて訪ずれる南緯47度付近のチリ そこには南米第2の面積をもつ巨大なヘネラル・カレラ湖があり その周りには 雪と氷に閉ざされたアンデスの峰が連なっているという。チリの気候・風土は 南緯30度以北の北部と30~40度の中部と 40度以南の南部では全く異なり 大部分が寒冷気候区に含まれる南部は開発が最も遅れているいわば過疎地域である。北部に延々と続く大砂漠地帯は 世界でも屈指の乾燥地帯として知られ 比較的温暖な地中海式気候に恵まれた中部では人口が密集して 農業・牧畜が盛んに行われ 南部は 北部や中部よりはるかに水と植生に恵まれてはいるものの 交通網の乏しさと寒さなどで定住する人は少なく 南へ向ってこの傾向は一層強くなる。

氷河湖へネラル・カレラを訪れる人は少ないが その周辺には チリが渴望する鉛・亜鉛鉦床が分布する。

## ロサンゼルスからサンチャゴへ

摂氏23度の午後3時 ロサンゼルスのホテルは 静まり返っていた。チェックインの時刻にはまだ間があるからだろうが フロントでは 愛想よく鍵を渡してくれた。旅装を解き 機内で読み終えた原稿を郵送するために出掛けようとしたものの 喉が渇いているのに気がついて 一瞬 思いとどまった。わざわざ喫茶室まで行くのも面倒だし 我慢できないほど渇いてもいい

が 水道の水をがぶ飲みしてから廊下へ出た。その途端に 向い側のドアが開き 中年の日本神士が姿を現わした。將に天の助けか 全く偶然に出会ったその神士は この日の夕方の飛行機で日本へ帰る 旧知のN社のW氏であった。そして 日本から太平洋を越えてアメリカへ渡った原稿は W氏の御好意で その日の内にアメリカから日本へ戻ることになった。何故 突然に喉の渇きを覚えたのか全く分らない。もし 部屋で水を飲まなかったならば W氏に会うことはなかったろう。チャンスは 思いがけなく 遠い異国の地でも訪れるものらしい。

まぶしい光の中を ダウンタウンへ歩いてみた。日本からの観光客が多いはずだが 殆んど見かけないのは ディズニールランドやサンタモニカの海岸で遊んでいるからだろうか。林立する高層ビル 軒を連ねる商店街の賑わい ロサンゼルスがこれほど発展すると誰が予測したのだろうか。コロンブスが1492年にアメリカ大陸を発見して 289年の後 ダウンタウンの一隅にあるオルベラ街で ロサンゼルス最初の商業地が誕生した。その基礎を築いたのは もとはといえば わずか50人ばかりのメキシコ系移民である。それから後 ロサンゼルスは年間降雨量 369mm 1月の平均気温摂氏 12.8度 8月の平均気温22.7度という温暖な地中海式気候と 降りそぐ光を背景に 発展の一途を辿り アメリカ第三の都会 そして市域面積第1位の都会に成長した。「天使達(ロス・アンジェルス)」というこの大都会の名の由来を知る由もないが 豊かな自然を意味しているようにも思えるし 昔の面影を今もとどめているオルベラ街で働らくメキシコ系の人々を見ていると 貧しくそして名もない50人余りの移民のひたむきな姿に捧げられた名のようにも思えてくる。

映画の都ハリウッドは心なしさびれているように静まり 谷間に造られた座席数2万の野外劇場ハリウッド・ボウルに人影はないが 有名スターの手形や靴跡がくつきりとつけられている広場があるグローマンズ・チャイニーズ・シアター付近には若人が溢れていた。深い緑の中に 豪壮な邸宅が ひっそりと建っている。世界

に名を知られた名優たちの住居区として有名なピバリールズだが 映画の斜陽化につれて 一人又一人 この土地を離れて行ったらしい。 サンセット・ストリート を行き交う車も多くはない。

午後6時20分発のサンチャゴ行の塔乗まで 小一時間ある。 混んでいる待合室で雑誌に読み耽っている時 若い女性に 片言の日本語で話しかけられた。 この待合室には このような女性が数人居り 日本人を見ると 必らずと言ってよいほど話しかけてくる。 目的は宗教関係の本を売りつけることで 彼女達の話は 例外なく 「私は日本のK大学に留学し…」で始まる。 もう何度聞かされたことか。 最初は一方的に聞き 2回目は中東で普通に使われている言葉で 3度合槌を 3回目はアフリカでも限られた地域でしか通用しない言葉で煙に巻き それからは全く無視することになっている。

せっかく良い客を捕えたとと思っていたに違いない彼女は 10秒とたたないうちに諦めた。 どうやら 若い日本人の男にねらいをつけたらしい。 きっとこき使われるなど思いながら 2人に目を向けた。 安の定 その男は コインロッカーに入っていたぶ厚い20冊ばかりの本を持たされて 1階の方へ降りて行った。 日本人の男は 外国人に劣らず 女性に親切らしい。

機内は満席であった。 南米へ帰るらしい客の多くは窮屈そうに 座席に納まっている。 特に身体が大きいわけではなく 足元に隙間なく置いた荷物の故だ。 毀れるような物ではなさそうだが 預けるのは心配なのだろうか。

大柄のステューワーズが「肉がいいか 魚がいいか」と 一人一人に聞いて回った。 隣席の客は肉と返事し 魚なら美味しいサーモンに違いないと予想して魚を所望した。 やがて運ばれてきた夕食の膳には 予想に違わず 実に美味しい大きなサーモンの切身が乗っていた。 隣席の客は 「硬い肉だ」とぶつぶつ言いながらも きれいに食べてしまった。 もしかすると この客は アルゼンチン人かもしれない。 たて続けに上映される2本の映画を見ながら いつの間にか 眠りに落ちた。

午前2時50分 アンデスの峰を染めて 太陽が昇った。 乗客は目覚め 機内は騒がしくなった。 自然の美しさに接した時 どんな人でも 一様に感嘆するものらしい。 だが 名だたるアコンカグアもこれに連なる峰も 旅人の心を知らぬ気に 足早に遠ざかっていってしまった。 ロサンゼルスから10時間20分 サンチャゴ到着は現地時間の午前9時40分である。



ロサンゼルスグローマンズ・チャイニーズ・シアター前にあるマリリン・モンローの手形と靴跡

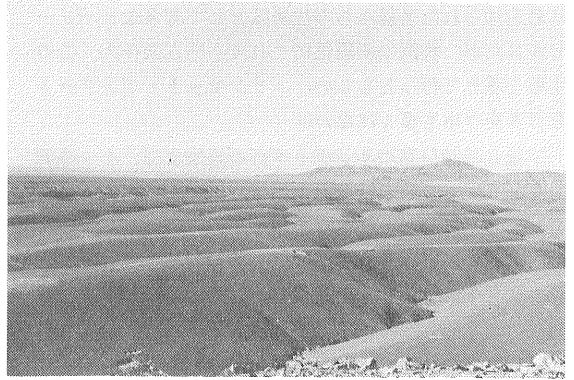
## サンチャゴ

海拔およそ 500m に位置する南米第四の都会サンチャゴは アンデスの高い峰を背にし 美しい花が咲き乱れる心和む大都会である。 だが一方 1810年に独立した隣国アルゼンチンの革命家として知られるサンマルチンに支援され 1818年にスペインの統治から独立して以来 160年余を経た今 道行く人の多くがスペイン系の白人とメステイソと呼ばれるスペイン人とインディオとの混血であるという厳粛な事実にあたる時 植民政策の根深さを感じずにはいられない。 様々な店が軒を連ねるウエルファノス通りとアグステイナス通りの賑わいをよそに 自由広場と憲法広場に挟まれて建つネモダ宮殿は 植民地時代からの歴史の重みを支えて 静かに建っている。 行政の中核の一つでもあるこの宮殿の内部では 内政と外交を中心に 活発な動きが一刻も休まず繰り広げられているはずだが そうした動きが余り感じられないのは 激動の歴史の流れに耐えてきたこの建物の重厚なたたずまいの故か 又は1973年9月 社会主義政権の頭首として君臨したアジェンデ大統領の自殺という血ぬられた出来事を秘めている故だろうか。

市の中心部を走る幅100mのアラメダ(ベルナルド・オイギンス)通りは 深い緑を割って 東西方向に走っている。 点々と建つ記念像 芝生に憩う人 ぴたりと寄り沿う若者達 ゆっくりと歩く老人 緑地帯で見かける風景が ここでも展開されている。 湿度の低い高原だけに 陽射しが相当に強くても 木蔭に入ると爽やかである。 それにしても 乾燥しきった北部に比べて この豊かな緑はどうだ。 延長およそ 4,200km 平均 176 km の幅をもつ狭長なこの国の気候風土に著しい地域性があることや 立ちほだかるアンデス山脈が著しい気候の変化をもたらす要因となっていることは容易に推

測できる。しかし南米と聞いてアンデス山脈と海岸山脈との間の海拔1,000~2,500mに広がる大扇状地が乾燥しきってタラパカ砂漠とこれに続くアタカマ砂漠になっていることやペルーとの国境に近いイキークからアントファガスタ付近までの年間降水量が僅か1~4mmであることをどれほどの人が容易に想像するだろうか。チリで最も有名なリゾートとして知られるイキークはすぐ近くに迫る海岸山脈の断崖と広々とした白砂の浜とで美しい風景を誇っている。天の恵みの水は全く期待できない。だが背後に大砂漠を控えていながら年平均気温は摂氏18度一番暑い1月の平均気温は摂氏21度に過ぎない。世界で最も乾燥しているといわれる大砂漠の間近にありながら一体何故このように気温が低いのだろうか。その秘密は海岸を流れる冷たいフンボルト海流の存在である。美しく凌ぎやすいイキークと灼熱の大砂漠との隣接は奇妙にさえ見え乾ききったこの砂漠には求める何物もないように思える。しかしこの砂漠こそかつてチリ経済の基盤を支えた硝石や塩の産地である。

アタカマ砂漠が尽きる付近から南へ向ってアンデス山脈は次第に高度を増し一方海岸山脈は低くなって南緯30度付近から南は地中海式気候を呈するようになる。そして北部では殆んど見当らない農耕地が広まってゆく。人々の憩いの場となる公園の広々とした森や咲き競う花に包まれたサンチャゴの自然美はこの温暖な気候の恵みである。アラメダ通りが尽きて間もなく真新しいホテルが視界に入った。広大な敷地をもつこのホテルのプールでは多くの美女が水にたわむれていた。だがこの旅の目的地では自然の巨大な爪跡と美しくさとを否応なしに見せつけられそしてそこに生きる人々の厳しい生活にふれこそすれ肌のあらわな美女を見ることはない。南緯およそ47度チリと



チリ北部の海拔2,500m付近の扇状地と海岸山脈(右側の山) アルゼンティンとにまたがる南米第2の面積をもつ巨大なヘネラル・カレラ(ブエノスアイレス)湖への出発は刻一刻と迫ってくる。

### ヘネラル・カレラ湖へ

バルマセダ行きの飛行機は2時間半ばかり遅れてサンチャゴを出発した。快晴に恵まれた絶好の飛行日和と思つたのもほんの束の間下界はどす黒い雲に遮ぎられてよく見えない。サンチャゴの南東方120km付近のアルゼンティンとの国境に聳える海拔5,290mのマイポ山を過ぎるとアンデス山脈は急激に低くなりこれから南部へ向って北部とは全く異なる風景が展開されてゆく。山は相変わらず険しい。しかし山間部にも山腹にも豊かな緑がある。南へ向うにつれて緑は深くそして広まってゆく。南緯40度を過ぎて眼下は緑一色に染った。何故これほどまでに急激に変貌するのだろうか。その原因はどうか。アンデス山脈の存在と太平洋岸の潮の流れにあるらしい。

西風によってオーストラリアの南方を東へ流れる寒流(西風海流)は南米大陸の南端部で太平洋岸を北上するフンボルト海流と太西洋へ流れるオークランド海流とに分かれる。一日6~12海里の速度で北上するフンボルト海流は南回帰線付近から北西方へ方向を変えて次第に南米大流から離れ沿岸流は赤道沿いに最も外(西)側の流れは南緯20度線にはほぼ沿って西へ流れ去ってゆく。又南へ向って山は低くなってはゆくが気温は次第に下ってゆく。南緯40度以南の南米の太平洋岸がアフリカ北西部の沿岸地帯やクリル列島の南側と同様に名だたる海霧の発生地となっているのはこうした自然現象と西風を遮ぎるアンデス山脈とによるのであろう。因みに南緯40度以南のいわゆるチリ南部地域は水と緑に恵まれてはいるものの土壌分布からみればツンドラ土地域に植物分布からみれば高山植



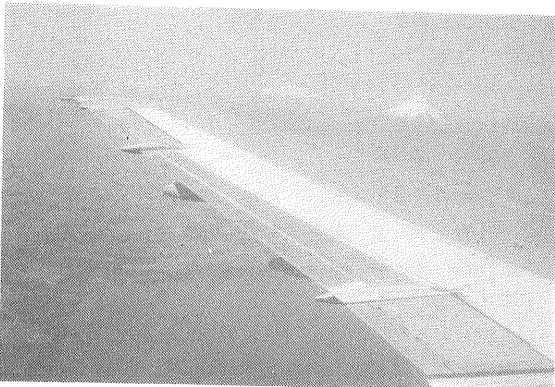
イキーク南東方のタラパカ砂漠に点在する硝石の採掘跡と工場

物地域に含まれ 農耕には適さない。

空席が目立つ機内で昼食が配られた。ワインに始まり 米飯・チキン・サラダ・桃・コーヒー・ココアと続く昼食は 結構いける。南米を旅していると1時間余りの国内線でも シャンパン・ワイン・ウイスキー・ビーフステーキなどの機内食を出すフライトもあるので 昼食がワインに始まるからといって この程度の食事は驚くに値しない。もっとも 世界でも大国の一つと見做されている日本の国内線で 始発便に乗ろうが最終便に乗ろうが まるで 辻褄を合せたように ジュースかスープ一杯にクラッカー2〜3枚といったサービスしかしてもらっていない者から見れば この程度の機内食でも大変な難く思われる。最初にサービスされたワインは知人の腹に入り 「お代りを貰ってよ」とねだる知人の頼みを素直に聞き入れて貰った2杯目も 知人の喉に流し込まれた。スチュワーデスは 2杯目が既に空になっている大きめのグラスを見て 「貴方の飲みっぷりはこの飛行機なみですね」と言い 「いや コンコルドなみですよ」の返事を聞いて 笑顔で3杯目をサービスして行った。チリのお嬢さんは どうやら 美人揃いで愛嬌もちらしい。そして 乗客の少なくとも1人は素直でウイットに富む人物らしい。

雲海を過ぎ 快晴の空の下に広がる緑野に 湖が見える。そして 南へ行くにつれて 湖の数は 次第に増えてゆく。その多くは アンデス山脈を挟む谷と同じく東西方向に伸びている。時折白っぽく見えるのは花崗岩であろう。そして その岩体の間を埋める第四紀の広大な堆積層を見下ろして オソルノ山が美しい姿を見せている。雪を戴く海拔2,660mのこの山は富士山と全く同じ姿をした チリの代表的な火山である。

プエルト・モントを経てコロコバド湾を過ぎると チ

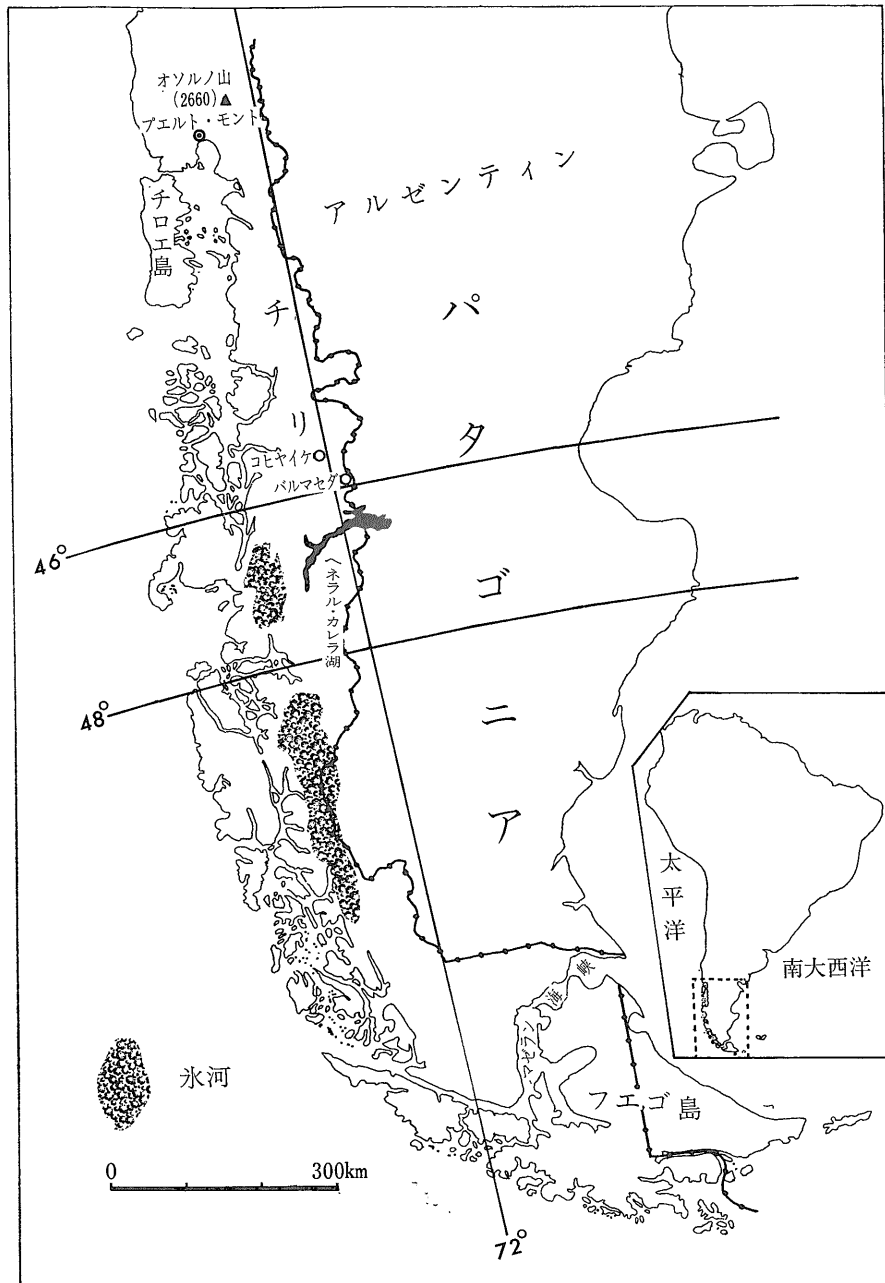


プエルト・モント上空から見るオソルノ山 (右端)  
数多くのチリの火山の中では最も美しい山である

リ北端部からここまでの単調さとは全く違って 海岸線は極めて複雑となる。内陸へ深く食い込む入江 とも数えきれそうにない大小様々の島 そして湖 この自然の造形が ここから南米大陸の最南端まで およそ1,700kmにわたって展開される様は壮大であり アンデス山脈の峰々が低くなっていることと考え合せると まるで南米大陸が南部から除々に太平洋に沈没してゆく姿を髣髴させる。何故 この地帯だけに この様な現象がみられるのだろうか。まず脳裏に浮かぶのは プレートの動きとアンデス山脈に秘められた過去の出来事である。

南米大陸の太平洋側には ナズカ・プレートと南極プレートがあり 両者は 北西—南東方向に延びるチリ海溝によって境されている。東へ向って動くナズカ・プレートは ペルー—チリ海溝をサブダクション帯として南アメリカ・プレートの下へ かなり急な傾斜でもぐりこみ アンデス山脈の形成や安山岩の強烈な活動 そして 中〜深発地震域を生みだしたと想定されている。しかし このサブダクション帯に相当する海溝は ナズカ・プレートと南極プレートと南アメリカ・プレートとの接合点付近に当るチロエ島沖合から南方へは続かない。又 マントルに対してプレートが静止の状態にあったか早い速度で動く状態にあったかを推測する方法の一つとして およそ1,000万年前以降に活動したと考えられるホットスポットの位置に目を向けてみると チロエ島以南の複雑な海岸線をもつ地帯北半部に2個の存在が考えられている他には 南アメリカ・プレートの西縁部では知られていない。上記年代のホットスポットは世界で122個知られているが その34%に相当する41個がアフリカ・プレートに存在する。誰もが最も安定した状態にあると見做しているアフリカ大陸をもつプレートにホットスポットが卓越することは このプレートがマントルに対して静止の状態か又はそれに近い状態にあったことを暗示しているように思われる。これを逆説的に見れば ホットスポットが存在しない地帯はかなり早い速度で運動したと想定することができそうである。このように見ると 激しい構造運動と火成活動に特徴づけられたアンデス山脈とこれに調和的に延びる地震域をもつ北部と 山は低く地震域のない南部との差異は このホットスポットの活動以前の現象とはいえ 理解できそうであり 又 複雑な海岸線は三つのプレートの境界部に当ることとホットスポットの稀少な存在によって暗示される現象とに係わり合っているように思える。

旅の目的はアンデス山脈の形成史を迎えることではないが 余りにも異なる眼下の景観を見つめているうちに

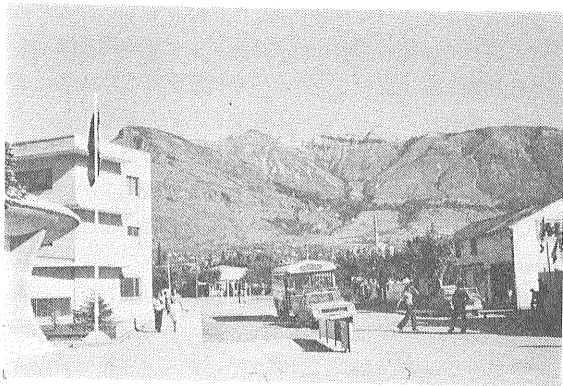


太平洋底に蠢くプレートや地球内部で高温物質を円柱状に造り出すホットスポットに想いが及んだ。つまらないことのようにだが これも地質家の習癖の一つであろうし 旅の楽しさの一つでもある

サンチャゴを発っておよそ2時間半 アルゼンティンとの国境の町バルマセダに到着した。地上の気温は摂氏24度 平家建の床板を鳴らす兵隊が多いのも国境の町

ならではの光景である。だが 空港付近には 一軒の家も見当らず 全く殺風景な所である。空港から64 km の埃っぽい砂利道を走って着いたコヒヤイケの町は立体的で美しい

人口3万5,000人のこの町は 青空と澄み切った空気に恵まれて 落ち着いた静かな町である。町はずれには淡水魚の日本人専門家が常駐して 淡水魚の養殖に精出しているとのことだが いかに美しい町だとはいえ そ



コヒヤイケの町 立体的な美しい高原の町で、これから南部への足となるエア・タクシー（小型飛行機）の基地になっている

の苦心は並大抵ではなかろう。エアタクシーをチャーターして早々に現地へ向う計画は飛行場の都合でもろくも崩れ結局出発は6時半に延期された。人影の余りない中心街には商店が軒を連ねてはいるが雑貨を商う店が多いようである。小じんまりした食堂に入ってパンとコーヒーの軽食をとった。賑やかに食事をしていた2家族の先客は見馴れぬ東洋人に興味があるのか時折横目で見ていた

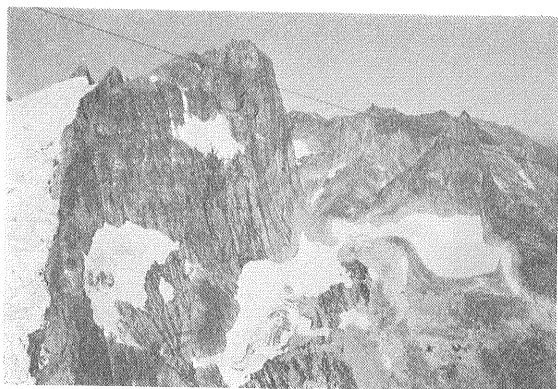
若い操縦士に操つられて小型機は舗装されていない滑走路からふわりと浮き上がった。そして間もなく氷河におおわれた深い谷を通り鋭い岩山の頂上をかすめるようにして南へ向った。時折身を大きくゆするのは気流の急変によるのだろう。焼けただれたような岩山も氷の谷も夕方のやわらかな陽を浴びて美しく光っている。余り高くもない峰の連なりだがや

はりその姿態にはアンデス山脈の厳しさが彫りこまれているようである。40分足らずの飛行の後ヘネラル・カレラ湖北岸に位置するサンチェスの滑走路に到着した。湖面はおだやかに波立ち寒さも余り感じられない午後7時15分陽はまだ高い

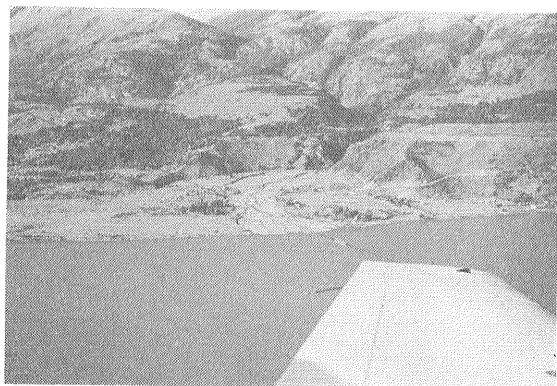
### ヘネラル・カレラ湖畔

旅装を解いて間もなく宿舎近くの草原で歓迎の夕食が始まった。午後8時半を回っているのにまだ明るい陽射しを浴びて枯れ草は金色に光っている。鉄串に刺された羊は勢よく燃える薪の炎にこんがり焼かれて脂をしたたらせている。羊の丸焼 厳しい自然の強大な力になぶられるままに時を重ねてきたこの壮大な景観の中ではもっとも似つかわしい料理かもしれない。久しぶりに会った顔見知りとの盛大な夕食も9時半過ぎの日没を迎えて終りを告げた。骨を刺すように深々と更けてゆくヘネラル・カレラ湖畔の夜凍てつくような空に光り輝く無数の星の群の中に南十字星が一きわ美しくクロスを描いている

延長およそ150km幅3~20km(平均10km)のヘネラル・カレラ湖はティティカカ湖に次いで南米第2の面積をもちチリとアルゼンティンとにまたがっている巨大な氷河湖である。湖畔に延々と続く平均傾斜40度の断崖無気味なまでに静まり返っているかと思えば突如として白い牙をむき出して荒れ狂う湖面に150にも及ぶ氷河が轟音と共に崩れ落ちる遙か彼方には白銀におおわれた光り輝やく峰の連なりがある。湖畔の目もくらむような断崖にくっきりと彫み込まれた氷河の搔痕はアルゼンティン側からチリ側へ向って氷河が流れたことを物語っている。目には見えぬほどの水滴



コヒヤイケからヘネラル・カレラ湖へ向う途中の山岳の景観。この付近には古生代の結晶片岩類が分布し、山腹の大部分は60°以上傾斜している



ヘネラル・カレラ湖北岸のサンチェス部落(川の右側)と滑走路(左側)

が凍って氷となり その塊まりは 目に見えぬ速さで低い方へ流れてゆく。そしてその流れは 岩山を深く抉って谷を造り やがて 湖を造ることになる。眼前に広がる巨大なこの湖が出来るまで 一体 どれほどの時が流れ去ったのだろうか。その水は 北岸付近では東の方へ 南岸付近では西の方へ 常に流れているという

自然の営みは 測り知れぬ程巨大でありながら その動態をあからさまには見せようとしなない。巨大な湖 その水面に黒々と影を落す断崖と背後に迫る秀峰の厳しい連なりを見つめ 途方もなく長い歴史を経てきたそれらの移り変りに想を馳せる時 余りにも小細工を弄しがちな人間の生きざまが嘆かわしくさえ思えてくる。人は 自然の美しさを賞で その偉大さに感動する時 己を忘れて陶酔し 洗い浄められた心の清々しさを知る。そして 一刻も止まることなく蠢き続ける虚飾に満ちた世界を脱れて 再び自然への陶酔を期待しながら 遙かな道程を辿ってゆく。しかしそれが ほんの一瞬を生きる小さな存在でしかない人間と その逆らいを拒否しながら永遠に生きる自然との 測り知ることさえできない大きな距たりに根ざしていることを棄れている人は少なからう

どちらかといえば鉛・亜鉛に乏しいチリでは 北部のアンデス地向斜と ヘネラル・カレラ湖周辺地域を含む南部のアンデス東部地向斜の両地域に 多数の鉛・亜鉛鉱床が分布してはいるが 稼行中の鉱山はこの湖畔の Silva 鉱山だけである。この鉱山の鉱床をはじめ ヘネラル・カレラ湖周辺に分布する鉛・亜鉛鉱床の圧倒的多数は結晶片岩を主とする変成岩類中に挟在する石灰岩を母岩とし 安山岩質岩類を母岩とする北部のアンデス

地向斜帯の鉱床とはかなり異なった性状をもつ。かつて これらの変成岩類の時代は先カンブリ時代後期～古生代初期と見做されていたが 年代測定などの成果によって 現在は デボン紀～石炭紀と考えられている。そして これらの上位には様々の岩層が分布してはいるが ペルム紀からジュラ紀中期 白亜紀後期の半ば頃から始新世 そして鮮新世などの地層を欠き 堆積の場の長年にわたる激しい変動を物語っている。一方 火成活動は 安山岩に始まり 花崗岩類の活動を経て 中新世頃の安山岩の活動で終結している。そして 一部がプエルト・ムルト以西に分布するパタゴニア花崗岩の活動の時期は ジュラ紀に始まり 東へ向って 白亜紀→第三紀初期と若くなっているということだが チリ西部に延々と続くこの花崗岩の時代区分と岩質とを図示したら 一体 どのような図面が出来上がるのだろうか

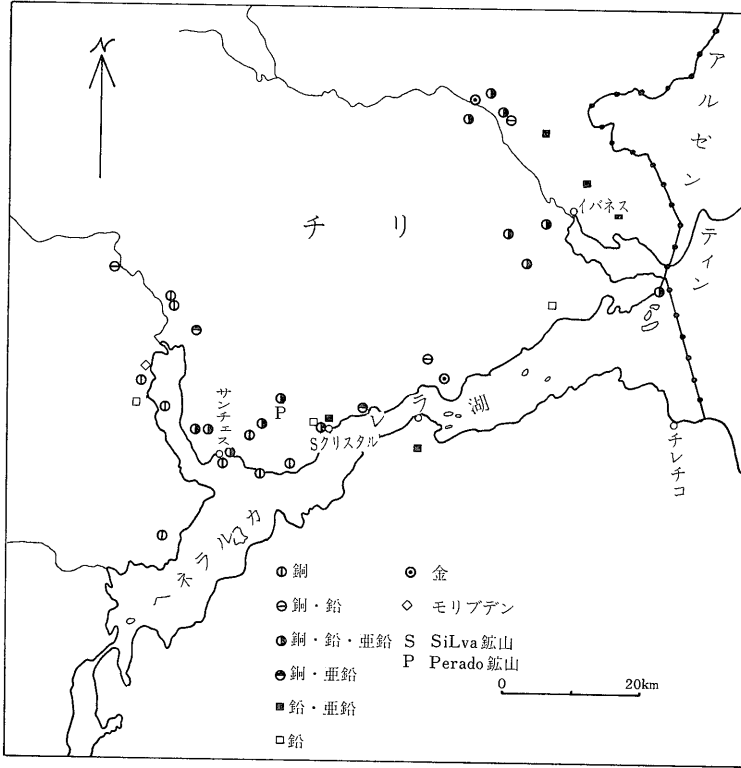
夏の盛りとはいえ 明方はかなり冷え込む。木造平家連の宿舎を足音を忍ばせて湖畔へ出てみた。風は全く吹かず 不気味なまでに静まり返った水面を見つめていると 突然 巨大な生物が姿を現わしそうに思える。



ヘネラル・カレラ湖東部の風景 遠景の山はアルゼンティン領、左側は湖岸段丘でこの湖の周辺地帯には8段の段丘がみられる。



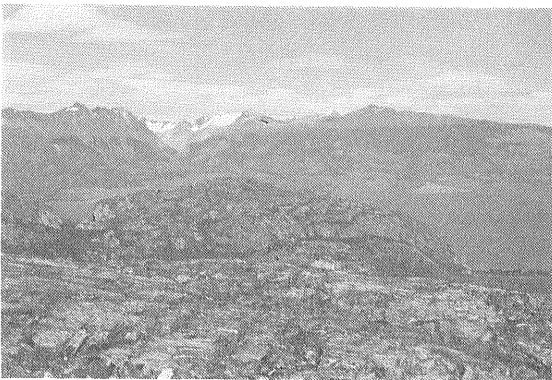
サンチェス（左側の部落）後方からヘネラル・カレラ湖西方を見る。比較的単調な東部とは異なり、この付近のヘネラル・カレラ湖は複雑な形をしている。



晴れ渡る大空に 氷河を載く峻嶒が 美しく輝いている。南岸に迫る岩山のかなり高い部分に 水平の線が見えるのは雪線であろう。後で判ったことだが その高さは海拔1,200m 湖面からの高さは700m 前後と推定される。しかし 寒冷気候区に属し 数えきれない程多くの氷河があるというのに 何故 雪線がこのように高いのだろうか。その秘密は ヘネラル・カレラ湖に湛えられた水が 湖畔付近の気温の低下を妨げていることにありそうである。 厳しい冬の最中でさえも雪に

埋もれることのないこの湖畔は 南部チリで最も気候に恵まれた所かもしれない。朝早い故か この湖を28時間で周航する巡航船の姿も サンチェスとイバネスとの間を6時間で結ぶ巡航船の姿も見えない。

チャーターした小型の舟は 9時30分にサンチェスの岸壁を離れた。日暮れが10時近いので 朝の発着も一般に遅くなる。出発後間もなく 小さな船体は前後左右に揺れ始めた。おだやかな湖面も 人が働き始める頃から活動するらしい。秒速10mの西風が常に吹き 瞬間最大風速40mに達するというこの地域では 身体がつんのめるほど舟を揺らす波が立つのはごく当り前のことだろうが ふだん舟に縁のない生活をしている者にとっては 決して気持の良いものではない。湖岸にそそり立つ花崗岩の巨大な壁の足元を かなり速く 水が流れてゆく。冷たい風に身をすくませながらの舟旅は 1時間半で終り 北岸のクリスタルに到着した。ここは 湖畔地帯で唯一の稼行鉱山である Silva 鉱山の入口である



サンチェス後方から見る南岸付近の植生（黒っぽい部分）と水平の雪線（植生の上限）

最初のインクラインから2段目のインクラインに乗り換えた。巨大な木材が積重ねられているのは転落防止のためだろうが 実際にどの程度役に立つのだろうか。傾斜およそ32度の山腹を 1本のロープに曳かれて鉱車

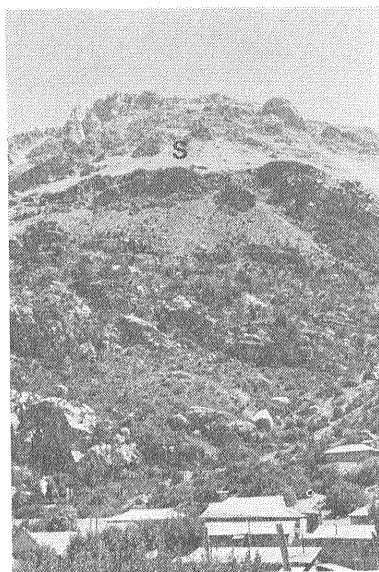


は現場へ登ってゆく。 乗り換えてから高さ400m 湖面から750mの高さにある Silva 鉱山に到着した。 吹き抜ける風は強く そして冷たい

1947年に採掘を開始したこの鉱山では スケアセット法で採掘が行なわれている。 当初は鉛を目的に採掘し亜鉛鉱を充填材としていたそうだが 現在は主としてかつて充填された亜鉛鉱を中心に 一日約90tの鉱石が掘出されている。 従業員は120名 クリスタルの総人口は600名ということだから この鉱山村の人口の20%が鉱山で働いていることになる

鉱床は 先に述べた石灰岩中に層状に胚胎し 幅100mで走向延長300mが確認されているが 北東方へ更に連続する可能性があると思われている。 粗粒の閃亜鉛鉱と方鉛鉱を主とする鉱石は 15%Zn と5%Pbの品位をもち 閃亜鉛中には13~15g/t 方鉛鉱中には30g/tの銀が含有されている。 鉱床層準の石灰岩が著しく擾乱され角礫化しているのが注意を引く鉱床である。

吹き荒ぶ強風に立つ若者は 対岸に迫る断崖の赤焼けを指しながら 「あの露頭の調査は大変でした。 傾斜40度前後の山腹には道らしい道はなく 湖から吹き上げる強風に煽られて身体がきかかず 4人のうち2人は身が凍んで辿りつけませんでした」と 何気なく語った。 恐らく 一步誤れば 又 試料採取中に手が足が迂りでもしたら 600m余の湖面へ一瞬の中に転落したであろう。 そうした苦しみの中に追いこんだ責任はすべて 初めてこの地を訪ずれた自分にある。 淡々と語る若者の辛さ苦しみに耐え抜いた姿を見つめ 責任の重さをひしひしとかみしめているうちに とめどもなく涙が溢れてきた。 冷たい春を迎え夏となって 氷河の動きは活発となる。 そして 砕け散る氷の塊や岩石は 時にはオーバーハングする岩壁をよじ登る地質家の頭上に 容赦なく落ちてくる。 純な心でねばり強く接しない限り 自然は真実を語ってはくれない。 余りにも峻しくそして厳しいこの山岳地帯に この若者達が足を踏み入れたのは冬の終りであった。 雪や氷を踏みしめ 身を切るように冷たい水の流れを渡りながら この若者達は 休む間もなく もう4カ月も調査に従事している。 しかし 海外の鉱物資源に依存しなければ生きてゆけない現在の日本に 疲れ果てた身と心を慰やす何物もない 辺境の地での筆舌には尽し難いこのような苦勞なしでは 長期にわたるその安定確保が極めて困難であることを認識している人がどれほど居るだろうか。 苦しみに耐え抜いた人々が成し得た仕事とその成果は たとえそれが 今すぐに社会に貢献しないものであるとしても 永久に



Silva 鉱山 (S) 付近の地形 頂上付近は安山岩。 鉱床付近は古生代の石灰岩。 下方の白っぽい岩塊は花崗岩

光り輝くことを信じたい。

Silva 鉱床に隣接して 未開発の Rosillo 鉱床がある。 この鉱床も層状の鉛・亜鉛鉱床だが 石灰岩と下盤の緑色片岩との境界部に胚胎しており Silva 鉱床よりも約200m 下位の層準に位置する。 鉱床の厚さは大よそ7m以下でその大部分は石灰岩を母岩としてはいるが 緑色片岩中にも鉱化作用がみられ かつ 緩傾斜の部分で肥大する傾向がある。 恐らく この鉱床は Silva 鉱床の劣化に備えて 当分の間は未採掘のまま温存されるのであろう

風は相変わらず強い。 湖を見下ろし乍ら下りてゆく冷たい切った鉱車にすがりつく手は 今にも凍えそらだ。 1本のロープに操つられ乍らかなりの速度で下りてゆく 鉱車に身をゆだねている時は 恐らく 顔の筋肉が引きつっていたのであろう。 終点に辿り着いた時には 一瞬 頬肉がたるむように感じた

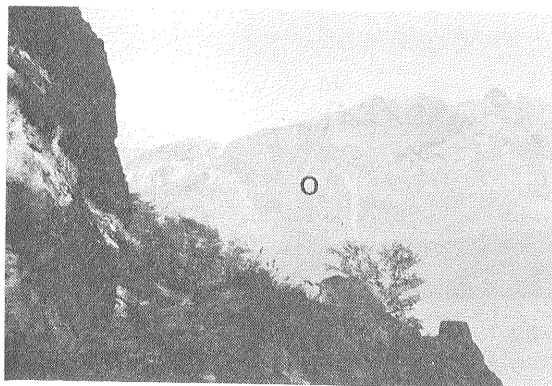
午後6時30分にクリスタルの岸壁を離れた舟は 8時にサンチェスに着いた。 遅い夕食を終えた憩の一時 ドイツ系移民の老夫婦が訪ねて来た。 「オペラのマダム・バタフライが大好きだ」という夫人だが この辺境の地に居ては 華やかなその舞台を見ることは所詮かなわない。 この老夫婦は 故国を離れてからのことを ぼつりぼつりと話しはじめた。 元々は測量技術者であったこの老人は ブラジルの首都であるブラジリアの建設当時 道路建設のための測量に従事したらしい。

「未開の原野で測量中 目ざわりな大きな盛土らしいものを取除こうと近づいて見ると巨大な蛇がとぐるを巻

いた姿だったなど 危険なことに直面したことも度々あったが 仕事を完了した時 大統領から多額の褒賞金を受けた時ほど嬉しかったことはなかった。仕事を終えてチリへ移住し その褒賞金で牧場を買い 老後の心配もなく最高に幸せな日々を送っていたのだが アジェンデ政権の誕生によって その牧場は一切の保障なしに無条件で取上げられ 止むを得ずこの地へ転居したのです。

何も無い所ですが 2人共元気でやっています」と語る老人の顔には 皺が深々とときざみこまれていた。

快晴の朝 かなり古びた車は北へ向って出発した。石ころだらけの坂道を目的の Perado 鉱山まで1時間も走ったというのに 宿舎からの距離は僅か20kmでしかなかった。大した道りではないが この道は 東西におよそ90km間のヘネラル・カレラ湖沿岸地帯にある道路の総延長75kmの約37%を占める最も長い道である。レンガと呼ばれる巨木の林の中に 木造の平家がぼつんと建っている。鉱山労働者の宿舎らしいが 深い緑の中の静かなそのたたずまいは 絵に見るような美しさをかもし出している。林を通り抜けると 視界が突然開け そこには 典型的なU字状の巨大な氷河谷があった。磨きぬかれたようなその壁にも底にも 今は巨木が生い茂り 後方に聳える雪山をより美しく見せている。この氷河谷の東壁近くに坑口をもつ Perado 鉱山では 8人の男が 坑内で働いていた。この鉛・亜鉛鉱床は Rosillo 鉱床と殆んど同じ層準に位置しており 高品位部では母岩の石灰岩は角礫化されている。良好な品位と厚さをもつ部分の石灰岩が角礫化されているという特徴は Silva 鉱床や Perado 鉱床だけでなく他の鉱床でも認められるということだが もしかするとこれは母岩の角礫化に関連して富鉱部が二次的に形成されたことを示しているのかもしれない。鉱山従業員の



ヘネラル・カレラ湖南岸の「赤焼け」(○)  
この斜面の傾斜は40°以上あり、ここへ行く道はない

話では この地区には5層準に鉱床があるということがだが これが事実とすれば ヘネラル・カレラ湖周辺の石灰岩を母岩とする層状の鉛・亜鉛鉱床は これらの層準のどれかに位置しているのであろう

午後4時 Perado 鉱山を離れ Shivas の選鉱場を見て 6時に宿舎へ帰った、 出発してからおよそ10時間を過ぎたこの時点では 一日の仕事を終りにしても恥じることもないが 1時間ばかり休息して 再び出かけることにした。路面の荒れた道を30分ばかり走った所を流れる小川の岸に 鉛・亜鉛の鉱化作用がみられる真白の石灰岩が露出していた。その露頭を見た瞬間 この露頭は Silva 鉱床と同じ層準に位置するのではないかとそうだとすれば Silva 鉱床からここまでおよそ10kmの間に その層準は600m前後下っていることになると思った。しかしその推測は 物の見事にはずれた。露頭の観察を終えて一息ついた後に見上げた断崖には 紛れもなく結晶片岩が露出し 露頭からほど近い所には この石灰岩の下位の結晶片岩が露出していたのである。いかに断片的な観察による推測とはいえ それが完全に否定されると やはり 心中おだやかではない。だが結晶片岩中に挟まれる石灰岩にも鉱化作用があり しかも 石灰岩の向斜状の構造をなす部分に見出されることを知って 気持は和んだ

宿舎への道から少し入った所に 林檎と桜の木があると聞いて立寄ってみた。人里を遠く離れた場所ではあり住んでいる人は居ないだろうと思い乍ら訪ずれた山蔭には 美事な林檎とさくらんぼがたわわに実り 1軒の民家が南斜面にぼつんと建っていた。不意に訪ずれた男達の姿を見て額にしわをよせた若妻は 間もなく 危険視すべき程のこともないと思ったのか または 早々に立去ってもらいたかったのか 笑顔でさくらんぼをたらふく御馳走してくれた。再び訪れることもなさそうな奥地を歩いて学んだ多くのことも そして 全く予想もしなかったさくらんぼの味も 恐らく 得難い思い出として生涯忘れることはなからう。宿舎着午後9時 湖面は薄墨色に染り始めていた

ヘネラル・カレラ湖に別れを告げる日が遂にきた。いつもより早く目覚めて 朝食のテーブルに着いた。毎夜顔を見せてくれた老夫婦は 心なしかさみしそうである。軽飛行機の音に促されて宿舎を立去る時の老夫婦の「アウフ・ヴィーダーゼン アレス・ゲーテ」の一言が 望郷の念を表わす精一杯の言葉のように思えて 胸に刺さった。見知らぬ人と懇意になれた喜びが大きければ大きいほど その人との別れは一層辛くなる。

「別れは待つ楽しみを与えてくれる」と聞くが この言葉も今は空しい

飛行機は 見送る人に翼を振りながら 東へ飛び去り 10分ばかり後には南岸の Facinal に着陸した. そして2時半に迎えに来ることを約して 間もなくコヒヤイケへ帰って行った

石ころだらけの荒涼とした滑走路の片隅で作業服に着換え 荷物を近くの民家に預けて 最後の目的地へ向うことになった. 自動車はなく 馬が頼りの調査行である. 冷たくそして強烈な風は容赦なく吹き荒れ 骨の髄まで凍るような寒さに がちがちと歯がなり続いた. おとなしそうに思えた馬は年老いていたのか 小さな水溜りを見つけてはその都度立止って水を飲み ゆっくり歩くかと思えば 突然 狂った様に走り出し 背に跨る人のことなど念頭にないらしい. 1時間半ばかりの後目的地に着いた. 湖から遠く離れたこの僻地で一体何で生計を立てているのか そこには 小さな6軒の家が一固まりに建っていた. その裏山に見える高さ50mばかりの崖に露出する凝灰岩の中に 方鉛鉱・閃亜鉛鉱・黄銅鉱・黄鉄鉱などを鉱染状に含む厚さ15mばかりの露頭がある. 小さな坑口をもつ探鉱坑道は かなり古いものらしいが 興行は短い. 露頭が母岩の構造と調和的に水平に連続していることから察すると 層状鉱床のように思えるが果してどうだろうか

露頭近くの小さな丘の頂から見る北岸の風景は たとえようもなく美しかった. 雪と氷河に閉ざされたモントウーラ トルニージョ アンティクーラの山々の鋭い姿態は 神々しいほどに美しい. たとえようもないその美しさは 時の流れのままに身を任せてこそ備ったものであろう. 人は自然の美しさを求めて旅し 秘境を求めて冒険の旅に出る. だが 安易な心と身仕度で訪

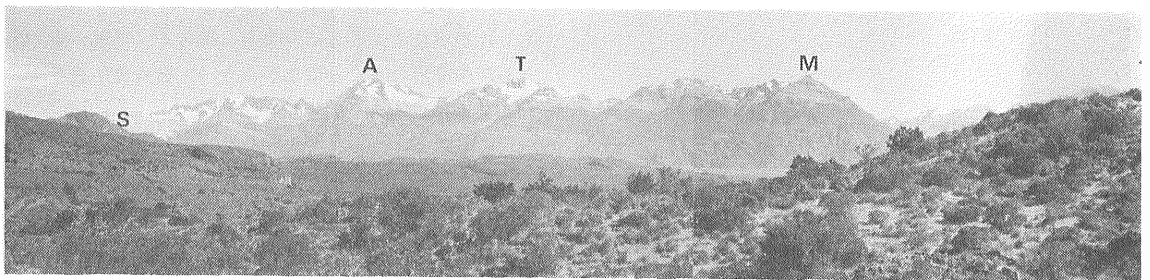


Perado 鉱山近くの氷河谷

この付近の雪線以下には、灌木とレンガと呼ばれる巨木が密生している

れようとする旅人を 自然は容易に受け容れてはくれない

帰り道には 強風が相変らず吹き荒れていた. 馬は狂ったように突然走り出した往路とは違って 老いの身をひしひしと感じているように うつむいたまま黙々と歩き続けた. 約束通りに来た飛行機は 白い牙をむく水面に機首を向け アルゼンティンとの国境を目指して飛び発ち ヘネラル・カレラ湖は間もなく視界から消えた. パルマセダ登サンチャゴ行の機内は満席であった. あでやかな服装の女性達の高い笑い声を耳にしながら ヘネラル・カレラ湖畔にひっそりと生きる老夫婦の姿を想い浮べていた. 一日も早く帰国した方が良いとは思うが 帰国後の生活が現在よりも幸福か否かは判らない. 午後9時 ヘネラル・カレラ湖の水面は明るい陽射しを受けて輝やいているはずだが 様々の思い出を得た南部への旅の終りのサンチャゴはもう深い闇の中である



Paurina 鉱床付近からヘネラル・カレラ湖 (右中央) 北岸を見る

モントウーラ山 (M), トルニージョ山 (T), アンティクーラ山 (A) に続く急峻な山の頂上近くに Silva 鉱山 (S) がある